

第30回  
あかつき賞  
受賞作品集



2020年3月  
上林暁顕彰会

## 「あかつき賞」について

黒潮町の生んだ作家、上林暁先生の業績を顕彰するとともに、本町の教育文化の発展を願って、平成元年（一九八九）「上林暁顕彰会」を結成し、様々な活動を行っています。

その事業の一環として平成二年度より、町内小中学生の作文を対象に「あかつき賞」を授与しています。

優秀作品は、各学校の先生方のご協力を得て厳選された応募作品の中から、上林暁顕彰会の選考委員が各学年一点ずつ選びました。

本賞が町民の間に上林先生への関心を高めるとともに、地域の教育文化の振興に大いに役立つことを確信し、期待しています。

第三十回「あかつき賞」受賞者名

中学二年	小学六年	小学五年	小学四年	小学三年	小学二年	小学一年	学年
浜田佳和	宮上祥鳳	秋田陽向	森稟花	今西遥斗	松本悠生	矢野愛梨	受賞者名
佐賀中学校	三浦小学校	田ノ口小学校	拳ノ川小学校	拳ノ川小学校	田ノ口小学校	田ノ口小学校	学校名
両国のかげ橋に	百人一首大会	受けつぎたい 黒砂糖作り	おばあちゃんのために	さようなら	だいきくんと のわくわくサンデー	かなちゃん がうちにかえって きた	題名
中野耕造	秋田喜俊	曾根健介	山本千代	山本千代	平林美和子	平林美和子	指導教員

## 目次

かななちゃんがかえってきた	矢野 <small>やの</small>	愛梨 <small>あいり</small>	1
だいきくんとのおくわくサンデー	松本 <small>まつもと</small>	悠生 <small>ゆうい</small>	6
さようなら	今西 <small>いまにし</small>	遥斗 <small>はると</small>	11
おばあちゃんのために	森 <small>もり</small>	稟花 <small>りんか</small>	14
受けつぎたい 黒砂糖作り	秋田 <small>あきた</small>	陽向 <small>ひなた</small>	19
百人一首大会	宮上 <small>みやうえ</small>	祥鳳 <small>しょうた</small>	24
両国のかけ橋に	浜田 <small>はまだ</small>	佳和 <small>かのわ</small>	29



## かななちゃんがかえってきた


田ノ口小学校 一年 矢野 愛梨

十二月十五日に、いつものかななちゃんが、おうちにかえってきました。

かななが、生まれたびょういんは、こうち大学い学ぶふぞくびょういんです。かなは、生まれたときは八九九グラムでした。すぐくちっちゃかったです。小さく生まれたので、しばらく、ほいくきの中でいろいろなきかいをつないでねていました。

おかあさんは、なつに入いんして、あきになってからかえってきました。それから、おかあさんは、かななちゃんにあいに、なんかいもおちちははこんで、なんこくのびょういんにいっていました。

十一月に、おかあさんが大学びょういんにいったとき、かななをだっこ



していました。かんどしさんが、ケータイでとつてくれました。見たら、だいぶ大きくなつていて、かわいくなつていました。おとうとのしよまは、しやしんを見せたら、こころをひねくりました。こたつの中にもぐりました。


一さいだから、おかあさんをとられた！つておもつたみたいです。

かなは、十二月ごろほいくきから出れて、おとうさんもだつこでできるようになりました。びょういんのしゅうさんぼしセンターの、めんかいコーナーのガラスのところで見ているとき、おとうさんがだつこしていて、かなが、ちよつとなきました。このときは、しよまはかべをとんとんして、

「かんとん。」

つていつていました。かえつてくるのがたのしみでした。だって、早くみたいし早くだつこもしたかつたからです。

いよいよ、十二月十五日になりました。



わたしとしようまが大ゆうからかえってきたら、かななちゃんがベッドでねていました。ひらひらのふくで、リボンが二つついていました。じぶんでくるつとまわって、下をむいてねていました。

わたしは、すぐにベッドのところについて、


「かわいい！」  
っていいました。

かえったよるに、おかあさんのそばでかななちゃんの、ノートを見ました。「やのかななちゃん。」って、小にかのかんごしさんがつくってくれた、ノートです。はなのくだがのいた日とかをかいています。わたしがかななちゃんにお手がみかいたのも、よさこいとかしようまのしやしんもはっています。

そのとき、おかあさんは、かななちゃんをすわって、ねらしていました。  
おかあさんが

「おかあさんも見せて。」





と行って、いっしょに見ました。

おかあさんから、かなちなちゃんへのメッセージがありました。（かなちなちゃんへ、小さく生んでごめんね。元気にそだってね。ママより）ってかいていました。よんでわたしは、すごくなきました。そうやったがやとおもいました。ごめんねってかいていて、かなしくなりました。「これかいたとき、おかあさんもちよつときびしかったよ。」と行っていました。


わたしはおかあさんが大好きです。わたしは一ばん上のおねえちゃんだからしっかりしないとイケません。なので、一人でできることをしてがんばりたいです。おかあさんは、

「いつも見てるよ。」

「かわいいあいは、いつもバリバリがんばってね。」

と行ってくれます。わたしは、おかあさん、ずっとずっとすきだよといいたいです。

わたしは、いえにかえったら、手をあらってだっこします。このごろの



かなは、おちちをよくのんで、げん気です。おちちのあとでミルクものむぐらいです。かわいくないたり、おはなしをしたりします。

いまは三千グラムをこえています。ミルクをすわすのはいがいとつかれます。だけど、おかあさんがいそがしいときだけは、わたしがやってあげます。

かなが大きくなったら、お花とかお水とかで、いっしょにおままごとをしたいです。

だいきくんとのおくわくわくサンデー

田ノ口小学校 二年 松本 悠生

朝、アニメを見ていると、ボタンと、もの音がした。

「だれだろう。」

と言うと、にわを見てお父さんが言った。


「だいきくんが来たで。」

その言ばを聞いて、こたつから飛び上がった。すぐに出ると、だいきくんと、だいきくんのお母さんと、お姉ちゃん、妹が来ていました。だいきくんの、お母さんがびっくりした顔でわらいながら、

「ゆういくん、くつをはいてくるのわすれちようで。」

と言いました。

「わあーっ本当やっ何か、石のところを歩いていたいと思ったら、くつ



を、はいてなかった!!」

と、ぼくもびつくりして、足をバタバタさせて言いました。うれしくてうれしくて、くつをはいていくのをわすれていました。

だいきくんは、入野小の二年生です。ほいくえんのとときから大のなかよしです。

えき伝大会で、会って、けいたいをいつでもできるようにしました。えき伝の日にあそべるってきいて、一週間後にいつあそべるか聞いてあそべることになりました。

さいしよに、二人で、馬に小学校の「かきせモーニング」に、朝食を食べに行きました。走っていくと、あいりちゃんに会いました。

だいきくんといっしよに、

「モーニングって、どこで食べるが。」

と、聞きました。あいりちゃんについていくと、ありました。

「大人、いっぱいいるね。」



「早く行ったら。」

と、同時にドアをあけ、おしました。

「おととととと。」

中に入ると、友だちの一花ちゃんがいきました。だいきくとせきにすわって、お金をたしかめました。

「どればあお金もつちよう？ぼくは、八百円。そっちは？」

「ぼくは、七百円。」

と、だいきくんが言いました。


「じゃあ、合わせて千五百円や。いっぱいあるなあ。」

と、ぼくが言って、いもけんぴと、おはぎを買うことにしました。いもけんぴは、一こ百円で、やすかったです。

ちようど、そこにモーニングの人が来て、せえので、

「いもけんぴ二つ、おはぎ二つください。」

と言いました。買って、モーニングの人に、



「お茶と水、どっちがのみたい？」  
と聞かれました。

「せーの、お茶がのみたいです。」  
って、声を合わせて言いました。

食べて、もう一こいもけんぴを買ってから家に帰りました。

つぎに、赤外線でうちあいをしました。

いったん外に出て、走ってやっていました。気づくと、学どうまで走って、うちあいをやっていました。一花ちゃんが車にのついているとき、だいきくんからくれました。ばれて、走っているとき、車も行っていたので、よこを走ってにげました。さつき、ぼくが立っていた所にだいきくんが来て、こっち見るなよと思ったけど、車の方を見てばれました。本気で走ってにげて、家にもどりました。

それから、ドッチボールをしました。チームは、お父さんとお兄ちゃんチームとSだいきくんとぼくチームでやりました。一回せんはかって二回



せんは、まけました。

つぎは、二人でもっとドツチを強くなって、一回せんも二回せんもれんぞくでかてるようになりたいです。

つぎには、近くの川で食パンをつけてつりをしたけど、つれませんでした。ほかにも、人生ゲームもやりました。

ぼくたちは、学校はちがうけど、すきなきょうかが算数で同じです。走るの、同じくらい速いです。力が同じくらい強いです。

今どは、二月九日に、だいきくんの家で、あそぶ予ていです。かもちに行くのは、ひさしぶりなので楽しみです。いつまでも、友だちと思えます。つぎは、もっと、ワクワクサンデーになると思います。

さようなら

拳ノ川小学校 三年 今西 遥斗

五月の初め、ぼくの家の小屋の後にあるおばあちゃんの畑で山本先生とモンシロチョウのたまごをさがしました。しかし、たまごがなかったの  
で、キャベツをわってさがすことにして、根っこごとひっこぬいて学校に  
持って帰りました。

次の日、理科の時間に虫めがねでたまごをさがしたけどやっぱりありま  
せんでした。


「ないねえ。」

と言ってさがしていると、四年生のゆいはちゃんが、

「見つけた。」

と言いました。見てみると一ミリぐらいのたまごが六つもつながって






ました。そしたらまた、ゆいはちゃんが  
「おる。おる。」

と言ってよう虫を見つけました。二ひきいました。色はだいたい色と赤  
むらさきでした。名前をつけてあげました。でぶつちよの方を「ニューた  
ん」やせている方を「緑くん」にしました。

毎日、キャベツを食べさせました。二ひきは、キャベツをむしやむしや  
食べて、うんちをぷりぷりと出しました。だんだん体の色が緑色になっ  
て、どんどん大きくなりました。そして、運動会の朝、キャベツを食べな  
くなって動かなくなりました。その次の日は学校が休みでその間に二ひき  
はさなぎになりました。一週間たったけど二ひきはさなぎのままでした。  
十日目の朝、さなぎのニューたんと緑くんが、ついに、せい虫になりま  
した。朝、学校につくと、ニューたんはもうさなぎのからからぬけていま  
した。緑くんはさなぎのからのとちゅうのところから出ていました。びっ  
くりしました。ニューたんはしゅわしゅわの羽をかわかしていて動いてい



ませんでした。羽は、だんだんぴんとなってきて、羽のうす黄色が金色みたいにぴかぴかでした。緑くんは羽に黒いてんてんが二つありました。羽をぱたぱたさせて外へ出たそうでした。ぼくは、

「すごい。」

とよろこびました。

昼になったので、先生といっしょにみつのある花をさがしました。花を持って教室に帰ると、ニューたんは箱からにげていました。かなしかつたです。緑くんも外に出たそうだったので、いそいで緑くんと写真をとって外にがしてあげました。手をふって

「さようなら。」

と言いました。

おばあちゃんのために

拳ノ川小学校 四年 森 稟花

先週の金曜日のばんにおばあちゃんが大変なことになりました。

夕方、おじいちゃんとおばあちゃんの顔を見に行ったら、おばあちゃん  
がご飯を食べる所のいすにすわっていました。いつもより元気がありません  
でした。


「だいじょうぶ。」

と言って、体温計で熱をはかってみると、三十七度五分でした。そのば  
んは、おばあちゃんがベットで横になると

「お大事に。」

と言って家に帰りました。

次の日、朝起きて、パジャマのままおばあちゃんの家に行きました。お



ばあちゃんは、まだベッドでねていました。

「具合はどう。」

と言うと

「ちよつとしんどい。」

と言いました。熱をはかってみると、三十八度ありました。私は、

「だいじょうぶ。病院に行かんでえいが？」

と聞きました。でも、おばあちゃんは、

「そんなちよつとの熱で病院なんか行かんでえい。」

と言いました。でも、やっぱり心配で、三十分ぐらいたって、また、おばあちゃんの家に行って熱をはかりました。まだ、三十八度ありました。

（本当なのかな。）と思ってもう一度はかってみると三十六度九分でした。二人で

「さつきとすごい差やん。」

「体温計こわれちようがやない。」




と話しました。

外を見ると、おじいちゃんがせんたく物のかごを置いていました。私は、おばあちゃんが見ていない時にせんたく物をほして、おどろかそうと思いました。

今までにおばあちゃんの家でせんたく物をほしたことがないので、最初、どうしたらよいか分かりませんでした。でも、前におばあちゃんがほしていたのを見たことがあるので思い出しながらやってみました。

まず、小さくて、ほしやすいう着を取りました。かわきやすいように、せんたくハンガーのぼうにかけたら、一つずつあけてほしました。タオルも同じようにしました。ほす所が身長よりもちよつと高い所にあったので背のびしてほしました。

十分ぐらいたったところでおばあちゃんが外に出てきました。そして、「稟花、ありがとう。おらんなったと思ひよつたら、せんたく物をほしてくれよつたがか。」



と言ってくれました。私は（ちよつとほしたただけなのに。）と思いましたが。まだ後に服が二枚のこつていたけど、おばあちゃんが

「分からんろ。」

と言ってほしてくれました。

最後までできなかつたけどおばあちゃんは喜んでくれました。やってみて良かったと思いました。

次の日には、まだび熱があつたけれど、おばあちゃんは元気になつていたのでほつとしました。

私にとっておばあちゃんやおじいちゃんは、親みたいな人です。それは、お母さんが夜きんでいない時や、お父さんが帰ってくるのがおそい時に、ごはんを作ってくれたり、いっしょにねてくれたりします。また、学校から帰ると

「お帰り。今日もつかれたろう。」

と言って笑顔でむかえてくれます。そう言ってくれるとほつとします。



おじいちゃんとおばあちゃんにはいつまでも元気でいてほしいです。


## 受けつぎたい 黒砂糖作り

田ノ口小学校 五年 秋田 陽向

私のおじいちゃんとおばあちゃんは黒砂糖を作っている。黒砂糖は、とても栄養がある。そして、さっぱりした甘さがありとてもおいしい。私は、この黒砂糖をほこりに思っている。しかし、高知市に黒砂糖を売りに行つたとき、黒砂糖を見て不思議そうな目をして通りすぎていく人が多く少し悲しかった。黒砂糖というものを知らないのかなと思った。

黒砂糖づくりは、まず砂糖きびの原木を育てることからはじまる。育てた原木をたばね、工場に持って行き、汁をしぼりかまに入れてトロトロにこむ。にこんだ汁をかまから上げ、型に入れて固まったらできる。かまでたいて、黒砂糖をトロトロにするのは技がいり、それをマスターしている人しかたくなできない。たく人はたき手といい、体力がいるため男





性が多い。型などにグラムをはかって入れるのは女性である。早いときは、夜の九時から次の日の昼ごろになるときもある。そのため、おじいちゃん、昼は三時からねているときもある。そんなとき、私はおばあちゃんと、たきこみご飯を作る。うちのたきこみご飯は、絶品でみんなにとっても人気だ。味付けは、おばあちゃん、おにぎりにするのは私だ。私とおばあちゃんは、そのおにぎりを持って朝の三時ごろに家を出る。工場に入ると

「早起きしてえらいね。」


と仕事をしているおばあちゃんたちに言われる。私は毎回のよう

「当たり前やろ！」

と言う。私より早く来てつかれているおばあちゃんたちにとつたら、私はよく働いてくれるからうれしいらしい。

「若い人に来てもらわんとねえ。」

おばあちゃんやおじいちゃんは、口ぐせのように私に言う。若い人に受けついでもらいたいという思いがあるのだろう。




黒砂糖は、一度はとぎれたものの昔から作っている農作物だ。黒潮町の黒砂糖の生産者は年々減少傾向にあるとみんな言っている。後をつぐ人がいないため生産者は、高齢の方が多く真夜中の作業はつらいと言っている方も多かった。黒砂糖の原木をとるのも重労働。おじいちゃんも

「こしがいたい。足がいたい。」

と言っている。今年、生産者さんをこまらせたのは細長い外国から来たカメムシだ。黒砂糖の甘い汁をすう虫だ。味にこだわっている人は、糖度の低いところを切りすてたり、一本丸々すてたりもする。けれど、少ししか作っていない人は仕方なく糖度の低いものもたいした人もいたそうだ。今年のうちのはカメムシのひ害が少なかった。おんちゃんらあは

「秋田さんは、草をはやしちようけんよ。」

と言って笑う。おじいちゃん是他の仕事があったため雑草を引いていなかった。でも、他の人ははいねいに草を引いていた。カメムシは雑草の汁をすったから私の家のひ害は少なかったのかなと思った。おじいちゃんは



みんなに

「草は生やしちよけよ。」

とふざけ半分で言いまわっている。


でも、おじいちゃんは前に

「もう黒砂糖、作るがやめろうかな。」

と言っていた。私は

「ダメで！もうちよつとがんばってや。私が黒砂糖食べれんなるやんか。」  
と出来るだけ明るく言った。本当は、黒砂糖を作っていて今まで話していた人と会えなくなるかと思うとさびしかった。それに、少しでも黒砂糖を知ってもらうために、おじいちゃんにはやめてほしくなかった。

私は、黒潮町の黒砂糖を全国の人に知ってもらいたい。私の夢は、パティシエールだ。その材料に黒潮町のこの黒砂糖を使いたい。もし、おじいちゃんが黒砂糖作りをやめてしまっても、なんとか黒砂糖を知ってもらうためにピーアールしていきたい。私が調べられなかったただけかもしれない




が、黒潮町のホームページには黒砂糖のことはのっていなかった。ぜひ、のせて黒砂糖のよさを全国の人に知ってもらいたいと思う。私もおいしいちやんの手伝いをしながら、黒砂糖のよさやおいしさを出来るだけ知ってもらおう努力をしたい。

## 百人一首大会

三浦小学校 六年 宮上 祥鳳

四年生の冬に、第一回校内百人一首大会がありました。その大会の一回戦で睦希君と対戦しました。その試合は、ぎりぎりです睦希君に勝つことができました。そのあとも順調に勝ち進み決勝戦までいきました。そして、決勝戦の相手は再び睦希君でした。睦希君は敗者復活戦から最後まで勝ち上がってきたのです。一回戦は、ぎりぎりです勝っていたので、決勝戦は負けるかもしれないと思い、少し不安でした。その大会で札を読んでいたのは宮村先生でした。宮村先生は、時々違う札を読んだりしてフェイントをかけてくるのでちよつといやでした。決勝戦が始まりました。接戦でぼくは睦希君に勝つことができ本当にうれしかったです。ぼくは第一回の大会で優勝することができましたが、その後の第二回、第三回の大会では優勝




できず、いい結果が残せていないので、小学校最後の大会では絶対に勝ちたいと思っていました。

いよいよ最後の大会当日になりました。今回優勝すれば、二回目の優勝になり、まだ誰も二回優勝している人はいないので、ぼくは絶対優勝したいと思いました。でも、句を覚えるのは正直大変だったので、全部の句を覚えることはできていませんでした。大会の当日、ぼくは休み時間を使ってかなりの句を覚ええました。集中したので、かなり覚えることができました。で、もしかしたら勝てるかもしれないと感じていました。ぼくは、勝ち進んで強敵と対戦することを想定して、苦手な札も集中して覚ええました。

一回戦は勝つことができ、二回戦は同じ六年生の琉生君が相手でした。琉生君は、

「祥鳳君は強いので勝てん。」

と言っていました。試合が始まると、札を取るのがすごく速かったです。二回戦も勝つことができました。三回戦の相手は勝てるかどうか不安



だった四年生の、ひなたちゃんでした。不安の理由は、ひなたちゃんは、ぼくが十七枚しか札を覚えていないのに、二十枚全部覚えているという情報があつたからです。試合が始まる前、ぼくたちの回りにみんなが集まりはじめました。みんなからの、

「頑張れ。」

という声がだんだんプレッシャーに感じてきました。試合の流れは、一枚目をひなたちゃんを取り、その後はずっとぼくが追いかける側でした。しかし、終わりに近づくにつれ、自分の方に得意札が集まり、なんとか二枚差で勝つことができました。ぼくはとりあえずほっとしました。でも回りでは、

「次はみくちゃんやけんやばいで。」

と言っていました。四年生のみくちゃんもかなり強いという情報で、札も全て覚えている感じでした。準決勝が始まりました。この試合では、前半に得意札がきたので、二枚差をつけて勝っていました。


(これならいける。)とおもいました。そして、次の句が読まれた瞬間、ぼくは、

「はいっ。」

と言って札を取り、(これで勝った。)と思い札を見ると違う札を取っていました。本当の札はぼくが取った札のすぐとなりになりました。ぼくはお手付きをしてしまったのです。自分の札が一枚増え、みくちゃんの札が一枚減りました。これで一気に流れが変わってしまいました。(やばいぞ。)と思いました。その後、なんとか追いつき、最後の一枚対一枚になりました。句が読まれたら、一文字目で絶対に取ってやると思い、集中しました。最後の一枚、ぼくの方が札を取るのがぎりぎり速かったので、一枚差で強敵のみくちゃんに勝つことができました。四年生のひなたちゃんもみくちゃんも本当に強かったです。

いよいよ次は決勝戦です。決勝戦の相手は誰だろうと不安でたまりませんでした。なんと決勝戦の相手は睦希君です。これまで何度も対戦したこ





とがある睦希君が決勝戦の相手になりました。今回は負けるかもしれないと思ひ不安になりました。決勝戦は二十人くらいの人が集まりました。

「睦希君頑張れ。祥鳳君頑張れ。」

と言う応援の声が聞こえてきました。ぼくと睦希君の得意札は全く違っているので得意札を確実に取らないと負けてしまうと思ひました。決勝戦が始まりました。ぼくと睦希君は、上の句五文字以内で札を取り合いました。試合が進み、最後、ぼくが一枚、睦希君が二枚という接戦になりました。ぼくは上の句二文字目くらいで取らないとやばいと感じました。句が読まれました。

「はいっ。」

ぼくが札を取ったとき、睦希君は、（はぁーはぁー）と荒い息になっていました。この試合がこれまで一番緊張し、一番頑張った試合でした。

小学校最後の校内百人一首大会で二回目の優勝をすることができて本当にうれしかったです。

## 両国のかけ橋に

佐賀中学校 二年 浜田 佳和

最近のニュースで日韓関係についての話題を多く目にします。そのニュースの中には、反日感情を持っている人々の厳しい声があります。なぜ日韓関係はいつまでもこじれたままなのだろうと、私は思いました。

「むくげの花の少女」は、朝鮮から連れて来られた一人の少女について書かれた本です。昔日本を治めていた豊臣秀吉が朝鮮に攻めて行き、朝鮮の土地を焼き、たくさんの人々が亡くなりました。そして、絵を描く人や皿などを作る人、布を織る人など、多くの朝鮮の人々が、日本に無理やり連れて来られました。その頃、土佐の国の大名だった長宗我部元親も朝鮮へ行き、朝鮮の人々を土佐の国へ連れて来て、元親の家来だった小谷与十朗という人が、この話の主人公である機織りの少女を、この黒潮町の上




川口に連れて来たのです。

私はこの本を読んで様々なことを考えました。一つ目は、この少女が、自分の意志ではなく、力づくで親から引き離されて日本に連れて来られたことです。その辛さは少女にしか分かりませんが、私だったら…：…などと考えると、言葉で表すことができません。私は親元を離れると一人では生きていけないし、一人で仕事をするには耐えられないと思います。本当に一人で生きた少女はすごいことだなと感じました。

現在日韓関係が悪いのは、この本のような歴史も関係していると思います。日韓関係についてまず考えるのは、人々の接し方です。この本の中で上川口の人々は、少女に対して決して嫌な思いをさせる行動はせず、優しく温かく接しました。少女にとっては親元を離れたことの悲しさは消えなかったと思いますが、上川口の人々に対しては嫌な思いをすることはなかったと思います。

現在韓国には、反日感情を持っている人がたくさんいます。ニュースを



見ると、デモをしている所や不買運動など、日本人の私達から見ると、嫌な気持ちになるものがたくさんあります。こんな状態の中、私は実際に韓国に行つて来ました。行く前はとても不安でしたが、行つてみると、ホームステイ先の家族をはじめ、ほとんどの人が日本人である私達に優しく接してくれました。しかし、一度タクシーで「日本人は嫌だ。」と言って、乗せてくれないことがありました。私は反日感情を持つことと、このような行動を取ることとは別だと思えます。反日感情や日本人が韓国人に対して反韓感情持っている人はたくさんいると思えます。その人達の気持ちを変えないことは難しいです。こんな気持ちを持つことは自由ですが、何もしていない私達へのこの行動は、やはりいけないことだと思えます。

私は訪韓中にホームステイ先の家族に現在の気持ちを聞きました。すると、日韓の歴史について触れてくれました。私は歴史についてあまり知りませんでした。日韓関係について歴史を中心に考えると、一人の人物の名前が出てきます。それは豊臣秀吉です。彼は、日本人にとっては全国統一



をした偉人ですが韓国では違って、韓国にひどいことをした極悪人として記憶されています。

この本の内容も、韓国に対して日本が行ってきたことのひとつだと思います。日韓関係が悪いのは、歴史だけではないと思いますが、原因の一つではあると思います。だから、一つずつ問題を解決していく必要があると思います。私の周りには、ニュースだけを見て、韓国に嫌なイメージを持っている人がいます。しかし、実際に行ってみると、日本人に対して嫌な態度をとる人ばかりではないことが分かりました。

私は今までなぜ日韓関係が悪いのか、全く分かりませんでした。しかし、この本を読んだこと、そして実際に韓国に行き、話を聞いたことで、この問題が少し身近に感じられ、自分なりに考えることができるようになりました。長年続いてきた日韓関係を改善することは本当に難しいことだと思いますが、私達が大人になる頃には、この問題が少しでも改善することを願い、自分ができることは全力でやろうと思います。